

次いで三月二十九日、彫刻科木彫実習担当助教畑正吉が教授に昇格した。畑は明治三十九年本校彫刻科(木彫)を卒業し、翌四十年十月農商務省海外実業練習生として渡仏。パリの国立美術学校に一年半ほど留学して彫刻を研究し、一面に於ては装飾美術に関する研究を為し、その後約一年半イギリス、イタリア、ドイツ等の美術工芸陳列館または工場を巡歴見学して同四十三年十月帰国。大正元年九月本校雇(木彫部助手)となり、同七年助教に昇格した。教授に昇格後、直ちに工芸彫刻研究のため一年間フランス、イタリアにおける在外研究を命ぜられ(追ってアメリカ在留も追加)、同年五月二日に出発、翌十一年七月二十五日に帰国した。しかし、翌八月二十一日には東京高等工芸学校教授に転任する。関野聖雲の起用は畑の辞任を見越しての措置であった。

⑧ 朝倉文夫、北村西望の起用と教室制

大正十年五月九日、本校彫刻科卒業生で帝展の代表作家である朝倉文夫と北村西望が教授(塑造実習担当)に任命された。彫刻科では前年の建島大夢の起用に続いて本年三月の関野聖雲(木彫実習担当)が起用され、さらにこの兩名の官展花形作家が起用され、教室制が実施されて、大正五年の美術学校改革運動以来の懸案がひとまず解決をみた。

朝倉文夫

朝倉文夫の経歴については幾多の文献資料があるが、ここでは本校採用時に提出された自筆履歴書を掲載する。

履歴書

原籍 大分縣大野郡上井田村大字板井迫百九拾四番地
寄留地 東京市下谷区谷中天王寺町貳拾番地

朝倉文夫

明治拾六年参月貳日生

明治貳拾参年四月 大分縣大野郡上井田村板井迫尋常小學校入学

同貳拾六年参月同校卒業

明治貳拾六年四月 大分縣直入郡高等小學校入学 同参拾年参月

同校卒業

明治参拾年四月 大分縣立大分中學校竹田分校ニ入学 同参拾五年

年九月竹田中學校修業中退學上京ス

明治参拾六年九月 東京美術学校彫刻撰科ニ入学

明治参拾九年九月 三海将銅像製作ニ應募 仁禮中将ノ像ヲ製作

シテ第一等ニ當選

明治四拾年参月廿九日 東京美術学校彫刻撰科ヲ履習シ同校研究

科ニ編入セラル

明治四拾壹年十月 第二回文部省美術展覽會ニ彫塑「闇」ヲ出品

シテ二等賞ヲ受ケ政府買上ケトナル

明治四拾貳年十月 第参回文部省美術展覽會ニ彫塑「山から来た

男」ヲ出品シテ三等賞ヲ受ケ政府買上ケトナル 同會ニ「猫」

及「老婆ノ像」ヲ出品ス

同年十月 東京美術学校研究科ヲ履修ス

明治四拾参年五月 名古屋開府三百年紀念新古美術展覽會ニ彫塑

「猫」ヲ出品シテ銀賞ヲ受ク

同年六月 興津建設ノ井上老侯銅像雛形ヲ製作ス

同年十月 第四回文部省美術展覽會ニ彫塑「墓守」ヲ出品シテ二

等賞ヲ受ケ同會ニ「九月ノ作」及深田氏ノ像ヲ出品ス

同年十二月 高山紀齋氏ノ像ヲ製作ス

明治四拾四年二月 南洋北ボルネオ、馬來半嶋、アナンバ群嶋ヲ

視察研究シテ同年九月帰朝ス

同年十月 第五回文部省美術展覽會ニ彫塑「土人ノ顔」二点ヲ出

品シテ三等賞ヲ受ケ政府買上ケトナル 同會ニ「産後ノ猫」ヲ

出品ス

明治四拾五年參月 滿州千金塞ニ建設ノ松田工學博士ノ像ヲ製作

ス

大正元年十月 第六回文部省美術展覽會ニ彫塑「若キ日ノ影」ヲ

出品シテ三等賞ヲ受ケ同會ニ「父ト母ノ像」ヲ出品ス

同年十二月 東京美術學校へ参考用トシテ銅鑿壹個ヲ寄附シ府知

事ヨリ木杯壹組下賜

同年同月 「南洋銅器圖録」ヲ編纂出版ス

大正貳年十月 第七回文部省美術展覽會ニ彫塑「含羞」ヲ出品シ

テ二等賞ヲ受ケ

同年十一月 兩陛下ニ献上ノ額面「葉牡丹」及「犬」ヲ製作ス

大正參年參月 大正博覽會彫塑部審査官被命 同會ニ「かげとさ

ゝやき」ヲ出品ス

同年五月 藤山雷太氏ノ像ヲ作ル

同年五月 國民美術協會理事選任

同年七月 農科大學依囑「ケルネル博士」ノ胸像ヲ作ル 同月竹

添進一郎氏ノ像及加納治五郎氏ノ像ヲ作ル

同年八月 「扮したるカチューシャ」ヲ作ル

同年九月 佐賀田中丸善藏氏ノ銅像製作

同年十月 第八回文部省美術展覽會ニ彫塑「泉」ヲ出品シテ二等

賞ヲ受ケ 同會ニ「眠る猫」ヲ出品ス

同年十月 吉村甚兵衛ノ像及荻原長吉氏ノ像ヲ作ル

大正四年一月 美術新報ヨリ賞美章ヲ贈呈セラル

同年三月 加藤弘之博士ノ胸像ヲ作ル

同年五月 大隈重信侯銅像製作

同年六月 國民美術協會理事再任

大正五年八月四日 美術審査委員會委員被仰付

同年十月 第十回文部省美術展覽會ニ「加藤弘之先生」ノ像ヲ出

品ス

同年十一月 島津齋彬公久光公忠義公ノ三銅像完成ス

大正六年五月 黒澤鷹次郎氏銅像製作

同年九月六日 美術審査委員會委員被仰付

同年十月 第十一回文部省美術展覽會ニ彫塑「時の流れ」ヲ出品

ス

大正七年六月 佐治栄太郎氏ノ銅像製作

同年同月 著士拉舎第一回彫塑展覽會ヲ開キ猫百態ノ内十二態ヲ

出陳ス

同年八月 早川千吉郎波多野承五郎兩氏ノ胸像ヲ作ル

同年九月六日 美術審査委員會委員被仰付

同年十月 第十二回文部省美術展覽會ニ彫塑「衝動」ヲ出品ス

大正八年三月 藏内治郎作氏ノ銅像ヲ製作ス

同年六月 著土拉舎第二回彫塑展覽會ニ猫百態ノ内十態ヲ出陳ス

同年九月十九日 帝國美術院展覽會審査委員被仰付

同年十月 帝國美術院第一回美術展覽會ニ彫塑「矜持」及「スタ

ー」ヲ出品ス

同年十一月 三井養之助氏銅像製作

大正九年八月 隈川醫學博士ノ像ヲ作ル

同年九月十五日 帝國美術院美術展覽會審査委員被仰付

同年十月 帝國美術院第二回美術展覽會ニ彫塑「頰」及田尻市長

ノ像ヲ出品ス

大正十年二月 九州沖繩八縣聯合美術展覽會理事及審査委員ヲ囑

託セラル

一罰ナシ

右

大正十年四月

朝倉文夫

北村西望

北村西望が採用時に提出した履歷書も現存するが、左記のように記述は簡略である。

履歷書

長崎縣南高来郡南有馬村千百三十一番戸ニ於テ出生

東京府下澩ノ川町上中里一七二番地

北村西望

明治十七年十二月十六日生

一、明治四十年三月 京都市立美術工藝学校彫刻科卒業

一、同年四月 東京美術学校入学

一、明治四拾五年三月 東京美術学校彫刻本科卒業。

一、文展授賞。大正四年二等賞。同五年特選。同六年推薦。

一、大正八年八月十九日 帝國美術院第一回展覽會審査員拜命

大正九年九月十五日 同展覽會審査員拜命

大正十年四月七日

右ノ通り相違無之候也

〔追加文書〕

大正元年十二月一日入營（一年志願）

（久留米）工兵第十八大隊第二中隊

大正二年十一月三十日任伍長 同日現役満期

北村は郷里の白木野尋常小学校、有馬尋常高等小学校で学び、一
時前者の代用教員および準教員をつとめた後、両校の代用教員、準
訓導をつとめ、明治三十六年四月に京都市立美術工芸学校に入学。
同校で大村西崖の教え子国安虎三郎に彫刻を学び、建昌大夢と親友
になった。同四十年、主席で卒業して東京美術学校彫刻科に入学。
第二回文展に「憤闘」が初入選して以来、第三回に「雄風」（褒状）、
第四回に「寂寥」、第五回に「壮者」（褒状）、第六回に「鉄工」、第
九回に「怒濤」（二等賞）および「醒めたる人」、第十回に「栗」、
「石工」、「晚鐘」（特選第一席）、第十一回に「光にうたれる悪魔」、
第十二回に「將軍の孫」、「或る日の夢」を出品、第一回帝展には

「創造の人」を出品し、実力を認められた。

教室制

彫刻科塑造部は朝倉、北村兩教授の採用後直ちに教室制を実施した。これに関して次の文書が残っている。

彫刻科教官會議 大正十年五月十二日

出席者 大村幹事 鈴川教務主任及中川雇

高村、建島、水谷、朝倉、北村教授 関野助教授

記事

一、教室志望ノ件

豫備科修了後直チニ教室ヲ志望セシム 研究生モ同様

右志望届ハ明後土曜日マデニ届出デシムルコト

二、卒業製作ノ點數

各教室別ニ點數ヲ定メ教室毎ニ発表 官報掲載モ同様トス

ルカ イロハ順トスルカ 右更ニ研究ヲ要ス

三、来土曜日午後一時ヨリ教員會議ヲ開キ教室配当并ニ標本室、

西洋画教室ヲ定ムルコト 其他諸般ノ打合ヲナスコト

右了リテ就任式并ニ生徒ヘノ論達ヲナス

伺〔大正十年五月十二日立案〕

自今彫刻科塑造部教室區分ヲ左ノ通り定メラレ来ル五月十六日ヨリ施行相成可然哉

記

建島教授受持教室

朝倉教授受持教室

北村教授受持教室

右教室ニ編入スル生徒豫備科修了後直チニ志望ヲ届出デシメ第一
年級ヨリ之ヲ行フモノトス

建島、朝倉、北村らはともに本校彫刻科の写実主義アカデミズムの洗礼を受け、各自研鑽を続けて官展で活躍し、建島は穏和な趣きのある作風、朝倉は写実の技巧鮮かな作風、北村は男性裸体像を主とする豪壮な趣きの作風というように、三人三様の特色を示したが、生徒たちは各自その好むところによって教室を選んだようである。この大正十年の時点では建島は四十一才、朝倉は三十八才、北村は三十七才で、いずれも精力溢れ、また、互いのライバル意識も強かったようだ。北村西望著『百歳のかたつむり』（昭和五十八年、日本経済新聞社）の「美校教授時代」にはその辺の事情が如実に記されている。

⑨ 塑造研究会

建島大夢、朝倉文夫、北村西望の若手三作家を迎えた彫刻科塑造部では自ずと生徒間にも活気が高まった。左記の文書にある塑造研究会もその証左の一つであろう。

教室借用願

彫刻科塑造部生徒中夏期休暇ヲ利用シ塑造研究会開催ノ申出有之